

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:入山美保

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月10日2限(10:10-11:20)・筑波大学2G棟		
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類		
研修・授業名	外国人児童生徒教育論		
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他:		
演題・テーマ☆	国内地域における外国人児童生徒教育 (③外国人児童生徒等受け入れの現状と施策 ⑥社会的、歴史的背景 ⑨地域の支援ネットワーク) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映		
到達目標	国内やつくば市における外国人児童生徒の受け入れの現状、施策や課題等を理解する。		
活動展開 (75分)	★	形態	留意点
導入: 15分 ・ <u>日本国内における外国人住民比率</u> ・ <u>日本語指導が必要な児童生徒数</u> ・ <u>日本語指導が必要な児童生徒の母語</u> ・ 外国人児童生徒の中退や <u>不就学の実態</u> ・ 「特別の教育課程」	③	講義	すでに日本は世界第4位の「移民大国」であり、「生活者としての外国人への包括的支援」が必要なことを伝える。
展開: 35分 ・ <u>在留外国人数の推移、国籍・地域別割合</u> ・ 日本国内の外国人受入れの動き ・ <u>在留資格「特定技能」、入国管理</u> ・ 外国人児童生徒の教育問題 ・ <u>茨城県内、つくば市内の在留外国人数、在留資格</u> ・ つくば市内の外国人児童生徒の現状	⑥	講義	日本国内全体から居住している地域に目を向けさせる。 外国人労働者の受入れ拡大に関する法案の内容にも触れる。 つくば市教育委員会の担当の方にお聞きした内容を報告する。
まとめ: 5分 ・ <u>つくば市国際交流協会の取り組み</u> ・ 筑波大学の「日本語教材開発演習」で作成した外国人生徒のための教材の紹介	⑨	講義	地域や大学での取り組みを紹介して、受講生がどのように関わっていけるかを知る。
			参考資料 Web記事 文科省サイト 法務省、文科省、茨城県庁、つくば市サイト 朝日新聞記事 つくば市国際交流協会サイト

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:一二三朋子

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp.207-244) 下線:内容・項目 (pp.72-76)

日時・場所	2018年11月10日3限(12:15-13:30)・筑波大学2G棟				
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類				
研修・授業名	外国人児童生徒教育論				
受講者	・人数: 33人 ・年齢層:10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: ・受講者の立場:大学生、大学院生、年少者支援者				
演題・テーマ☆	外国人児童生徒教育を捉える視点 (①外国人児童生徒の教育の考え方<基礎>(外国人児童生徒とは(定義)/発達の視点)、⑥社会的、歴史的背景) ☆研修内容(報告書 pp.72-76)を反映				
到達目標	・年少者日本語教育の捉え方への考え・見方を深める (日本語の位置づけ/年少者日本語教育を捉える視点)				
	活動展開 (75分)	★	形態	留意点	参考資料
	導入:年少者日本語教育というときの「日本語」の位置づけについて(JHL/JFL/JSL) 展開:①JHL~ハワイへの移民の歴史の概説 ②成人との違い ③年少者の日本語学習に関する誤解とその要因 ④年少者日本語教育を捉える視点 まとめ:質疑	①	講義	「日本語」の多面性の理解を促す。 過去における移民の歴史を概観することで、現在における日本での年少者の日本語の問題についての理解を深める。 成人との違いに目を向け、年少者に起因する困難点の理解を促す。 JSL生徒の日本語に感ずる誤解を紹介し、以降の授業の導入とする。 年少者日本語教育を捉える視点に関する理解を深める。	

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:一二三朋子

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月10日4限(13:45-15:00)・筑波大学2G棟			
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類			
研修・授業名	外国人児童生徒教育論			
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: ・受講者の立場: 大学生、大学院生、年少者支援者			
演題・テーマ☆	心理学から見た外国人児童生徒教育 (⑫外国人児童生徒の心理と適応<基礎>、⑪母語・母文化・アイデンティティ<基礎>(母語/継承語)) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映			
到達目標	外国人児童生徒の遭遇する文化間移動と適応過程及び文化的アイデンティティに関する理解を深める			
活動展開 (75分)	★	形態	留意点	参考資料
導入: 異文化間を移動することとは 展開: 1. 異文化体験 カルチャーショック 異文化適応の時間的推移 異文化適応の3つの側面 親の適応と子供の適応 2. 文化的アイデンティティ アイデンティティの多次元性 アイデンティティと精神的健康 文化的アイデンティティとは 文化的アイデンティティ事例紹介 日系ブラジル人 インドシナ難民 帰国子女 その他 新しい文化的アイデンティティのあり方 まとめ: 質疑	⑫	講義	外国人児童生徒は、文化間を移動する存在であること 異文化適応の類型を紹介 複数の文化間を移動する中でアイデンティティの不安を抱える子供たちに関する理解を深める。	

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:長田友紀

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月10日5限(15:15-16:30)・筑波大学2G棟		
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類		
研修・授業名	外国人児童生徒教育論		
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: ・受講者の立場: 大学生、大学院生、年少者支援者		
演題・テーマ☆	子供の第一言語習得 (⑩認知発達と言語習得<基礎>(第二言語習得のプロセス、二言語相互依存仮説、ダブル・リミテッド、マルチリンガリズム(加算的・減算的バイリンガリズム)/⑪母語・母文化・アイデンティティ<基礎>(母語/継承語)) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映		
到達目標	子どもの言語獲得(言語習得)について母語を中心として理解する。		
活動展開 (75分)	★	形態	留意点
導入: 人類進化の歴史と、子どもがたった数年で流暢な母語の獲得する様子とを比較してみよう。 展開: ・母語の代表的な定義を知る ・子どもの乳幼児から小学校入学あたりまでの発達の様子を知る。 ・言葉の発達における環境の影響について考える。(児童虐待、経済格差など) まとめ: 母語の獲得のポイントについて確認する	⑪ ⑩ ⑪	活動 講義	子どもの母語獲得のすごさと不思議さに気づく 前言語期、3つの認知革命、共同注視、社会的参照、愛着の重要性、分離不安の強さと言語発達関係 言語の獲得における「訓練」「強化」「模倣」が果たす役割は小さい 文字の習得発達段階 乳幼児期については、「50の文字を覚えるよりも100の何だろう？」 言語障害、失語症、虐待 自然に獲得すると思われる母語も、できないことがある。豊かで温かな環境の子ども全面的成長や発達を保障することが大切。
			参考資料

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:松崎寛

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月10日6限(16:45-18:00)・筑波大学2G棟			
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類			
研修・授業名	外国人児童生徒教育論			
受講者	・人数: 33人 ・受講者の立場: 大学生、大学院生、年少者支援者 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他:			
演題・テーマ☆	子供の第二言語習得(⑩認知発達と言語習得<基礎>(第二言語習得のプロセス、二言語相互依存仮説、ダブル・リミテッド、マルチリンガリズム(加算的・減算的バイリンガリズム)/⑪母語・母文化・アイデンティティ<基礎>(母語/継承語)) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映			
到達目標	児童生徒の第二言語習得に関する諸問題について理解を深める			
活動展開 (75分)	★	形態	留意点	参考資料
導入: 児童生徒の第二言語習得における心のケアを必要とするつまずきを知る	⑪	講義	第三回「心理」第四回「第一言語習得」の話とつなげつつ、学習を阻害する不安について理解する。	新宿区(2012)「外国にルーツを持つ子どもの実態報告書」
展開: 1. 母語保持、母語喪失、外国語学習における学習動機について知る。 「外国人児童生徒に必要とされる3つの教育」について知る	⑩		母語の重要性について理解し、なぜ母語保持や継承語教育が難しいのかを考えさせる。	浜松市における日本語教育の流れ(朝日新聞2018年9月30日)
2. 第二言語習得の一般的なプロセスについて理解する。認知発達と言語の関係を理解する キーワード: ダブル・リミテッド、沈黙期、臨界期、均衡・偏重・連続・同時・付加的・削減的バイリンガリズム、分離基底言語能力モデル、共有基底言語能力モデル、BICSとCALP、敷居理論と二言語相互依存仮説、	⑩ ⑪ ⑱		子供と成人の第二言語習得の違いについて理解する。 個人/社会における二言語併用に関する術語を整理する	JSLカリキュラム(中学校)(文科省)
まとめ: 質疑			入り込み授業、取り出し授業、イマージョン等の用語の整理	

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:長田友紀

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月11日2限(10:10-11:20)・筑波大学2G棟		
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類		
研修・授業名	外国人児童生徒教育論		
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: ・受講者の立場: 大学生、大学院生、年少者支援者		
演題・テーマ☆	学校教育学から見た外国人児童生徒教育 (③外国人児童生徒等受け入れの現状と施策(在留外国人統計、関連施策、就学義務と学習権、定時制高校、夜間中学)、④学校組織や教育行政(構内組織、都道府県行政と市町村行政・教育委員会による指導)、⑤学校の受入体制(構内の指導体制、「特別の教育課程」)、⑧保護者との連携(教育制度・学校文化の違い)) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映		
到達目標	日本の学教教育制度の概略について、言葉の教育の中心にして理解する。		
活動展開 (75分)	★	形態	留意点
導入: 憲法第26条の教育の義務の文言を読んで考えてみよう。	③	活動	* 国ごとに教育制度は異なる 法令の種類 条約・法律・条令・規則… ・学習指導要領
展開: ・学校教育の制度の概略を知る。 ・言葉に関わる教育の条約・憲法・教育基本法、学習指導要領、文科省の通達について考える。 ・教育課程における言葉の教育の仕組みについて考える。 ・言葉の発達における環境の影響について考える。		講義	義務教育の様々な学校 OECD 生徒の学習到達度調査 螺旋型カリキュラム、二重カリキュラム、 一次のことばと二次のことば バーンスタインのコード理論 日本語教育が必要な高校生 公立の中退率と進路状況 保護者の就学義務 「特別の教育課程」による日本語指導、 母語教育、「国際人権規約」 「児童の権利に関する条約」、 2017年の特別支援学校在籍率
まとめ: 学校教育の制度と言葉の教育についてそのポイントを確認する。			

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:松崎寛

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月11日3限(12:15-13:30)・筑波大学2G棟			
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類			
研修・授業名	外国人児童生徒教育論			
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: <p style="text-align: right;">・受講者の立場: 大学生、大学院生、年少者支援者</p>			
演題・テーマ☆	言語教育学から見た外国人児童生徒教育 (⑰日本語指導の理論と方法<専門>(日本語教育の方法、日本語の授業作り、スクヤフォールディング、フォーカスオンフォーム、リキャスト)、⑱個別の指導計画の立て方、⑲言語能力の把握(コミュニケーション能力、言語能力の測定法、4技能のバランス)) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映			
到達目標	児童生徒の日本語支援に関する諸問題について理解を深める			
	活動展開 (75分)	★	形態	留意点
	導入: 年少者 JSL カリキュラムを中心に、日本語教育の方法、日本語の授業作りについて理解する。「日本語支援の5つの視点」について知る キーワード: <u>理解支援、表現支援、記憶支援、自律支援、情意支援</u>	⑰	講義	サバイバル日本語プログラムや教科との統合の実例を知る
	展開: 1. <u>年少者用教科書</u> について知る。教材の実物や「かすたねつと」「CLARINET」 2. <u>DLA 実施方法</u> をもとに外国人児童生徒の言語能力をどう定義し、どのように測定するかについて理解する キーワード: <u>コミュニケーション能力、言語能力の測定法、4技能のバランス、</u> 3. <u>DLA</u> における「介入」の意義と ZPD における「足場作り」について知る。 4. フィードバックについて知る。 キーワード: <u>明示的/暗示的訂正、フォーカスオンフォーム、リキャスト</u>	⑱		・年少者用教材を実際に見て、成人用教材との違いを考えさせる ・JSL 評価参照枠における「支援付き」と <u>DLA</u> の対話における「介入」の共通理念について気づかせる ・ヴィゴツキーの「発達の最近接領域(ZPD)」を知り、 <u>スクヤフォールディング</u> の重要性を理解する 効果的なフィードバックの方法について、その背景理論と具体的な方法を理解する
	まとめ: 質疑	21		『こどものほんご』にほんごをまなぼう』他 ・DLA 実施の youtube 映像 ・伊東祐郎 (2018)「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント～DLA の活用に向けて～」

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:澤田浩子

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月11日4・5限・筑波大学2G棟			
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類			
研修・授業名	外国人児童生徒教育論			
受講者	・人数: 33人 ・年齢層:10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他: ・受講者の立場:大学生、大学院生、年少者支援者			
演題・テーマ☆	学校現場の実践から (②教育コミュニティのデザイン、③外国人児童生徒等受入の現状と施策、⑤学校の受入体制、⑧保護者との連携、⑩母語・母文化・アイデンティティ) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映			
到達目標	外国人児童生徒の受入状況と日本語支援について、つくば市A小学校の教頭・日本語指導教員を招いて、具体的事例を聞くことで、現場の課題について理解を深める。			
活動展開 (75分×2)	★	形態	留意点	参考資料
導入: 1. <u>外国人児童生徒とは</u> (10分) 2. <u>日本語指導の必要な児童生徒数の受入れ状況に関する調査</u> (10分) 展開: つくば市A小学校の具体的事例について知る(教頭・日本語指導教員によるゲスト・トーク) 3. つくば市の外国人児童生徒の受入について現状を知る(30分) ・ <u>地域特性</u> ・ <u>当該自治体の受け入れ状況</u> ・ <u>就学義務と学習権</u> 4. 学校の受け入れ体制を知る(25分) ・ <u>構内の指導体制(教員加配・日本語指導員・ボランティア)</u> ・ <u>取り出し指導</u>		講義 ③ 講義 ⑤ 講義	全国的な状況について、再度確認をする。 茨城県の他自治体や他県の状況と比べながら、在籍者数や来日の目的・期間、保護者の経済状況に多様性があることを知る。 つくば市A小学校の話聞いて、加配教員の制度や日本語教室(取り出し授業)と日本語指導教員の業務について、理解を深める。	文科省「外国人児童生徒受入れの手引き」

<p>5. 学校文化の違いや保護者とのコミュニケーションにおいて生じる課題を現場の教員と共有し、よりよい解決についてディスカッションする (60分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>多数派であることの自覚</u> ・<u>異文化間能力</u> ・<u>保護者の教育への関心と日本語力</u> ・<u>学校文書の伝達</u> ・<u>教育制度・学校文化の違い</u> <p>6. つくば市 A 小学校に在籍する外国人児童生徒の言語的背景について知り、日本語習得の困難さと<u>ダブル・リミテッド</u>の課題について理解を深める。(10分)</p> <p>まとめ: 行政や学校現場だけの問題ではなく、地域社会全体で取り組んでいく問題であることを理解する。(5分)</p>	<p>②</p> <p>⑧</p> <p>⑩</p>	<p>活動</p>	<p>運動会の練習、ラマダン等の宗教行為、バスの乗車マナー、給食の制限、ピアスなどのファッション、プールの同意書など、外国人児童生徒やその保護者が戸惑い、問題化しやすい事例について話を聞き、学校文化の違いとそれに直面する児童・保護者の戸惑いについて理解を深める。</p> <p>ダブル・リミテッドが決して特殊な事例ではないことを具体的ケースから知る。</p>	
---	----------------------------	-----------	---	--

カリキュラム(計画) 外国人児童生徒教育論

作成者 氏名:澤田浩子

○養成・研修 / ○基礎・○専門・支援員 (該当するものに○)

★参照したモデルプログラム NO. (報告書 pp. 207-244) 下線: 内容・項目 (pp. 72-76)

日時・場所	2018年11月11日6限(16:45-18:00)・筑波大学2G棟			
実施団体・機関	筑波大学 ・ 日本語・日本文化学類			
研修・授業名	外国人児童生徒教育論			
受講者	・人数: 33人 ・年齢層: 10-20代(30)名 30-40代(3)名 50代()名 60歳以上()名 ・その他:			
演題・テーマ☆	言語学・日本語学から見た外国人児童生徒教育 (⑩日本語に関する内容、⑪日本語指導の理論と方法、⑫個別の指導計画の立て方) ☆研修内容(報告書 pp. 72-76)を反映			
到達目標	言語学・日本語学の知識を、外国人児童生徒に対する日本語プログラムの各段階と結びつけて理解する。			
活動展開 (75分)	★	形態	留意点	参考資料
導入: 1. 各種日本語プログラムについて概略を理解する(10分) ・「サバイバル日本語」・「日本語基礎」 ・「技能別日本語」・「日本語と教科の統合学習」 ・「教科の補習」	⑩	講義	児童生徒の学年や習熟レベルに応じて、目的や内容の異なる5つの日本語プログラムがあることを理解する。	文科省「外国人児童生徒受入れの手引き」
展開: 2. 「サバイバル日本語」「日本語基礎」(30分) ・日本語の仕組みの全体を捉える(日本語の構造: 文構造・談話構造) ・学習ニーズとシラバスの関係を知る(文型シラバス・場面シラバス・機能シラバス)	⑬ ⑭	講義	日本語の文構造・談話構造に関する日本語学の知識をおさえたうえで、それらとシラバスとの関係、日本語プログラムとの関係を結びつけて理解する。	『みんなの日本語 初級I』、 『Situational Functional Japanese I』
3. 「日本語と教科の統合学習」について知る(30分) ・教材における支援(教材リライト) ・教室発話における支援(JSL カリキュラム、AUカード)	⑮	講義 ・ 活動	国語の教科書を用いて、教材リライトの考え方と方法を学び、実際にやってみる。 JSL カリキュラムと AU カードの構造を理解した上で、理科の教科書を用いて実際の授業を想像しながら、AUカードを利用した教室発話の構成の仕方を学ぶ。	『新編 新しい国語 二上』東京書籍 『新版 たのしい理科 3年』大日本図書 LSJ カリキュラム(小学校編)、AUカード
まとめ: 日本語学における文構造・談話構造に関する知識を、各種日本語プログラムに位置づけて理解し直し、日本語支援のスキルに転化する方法を学ぶ。(5分)				